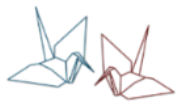


# 未来に向かって伸びる鶴嶺の子

## 鶴小だより 12月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校  
校長 日高 大司郎  
令和4年11月30日発行



### 自己肯定感と子どもたち

先日、6年生のあるクラスの体育にお邪魔させていただいて、子どもが取り組んでいる「鉄棒運動」に関わらせていただきました。

「鉄棒運動」ってなかなかつらい運動です。まず、筋力が必要です。そして、手が痛くなります。足かけ回りなんてやったら、膝裏が赤くなって、痛むこと間違いなしです。それから、普段しないような体の使い方をします。頭部が逆さまになるので、その感覚に慣れていない子どもは、非常に怖がります。だから、やりたくないと言う子も多いのです。

昼休みの時間に、身が空いているときは、「校長先生の鉄棒教室」と題して、子どもたちができるようになりたい技の実現のために、声をかけたり、補助をしたりすることを不定期に続けています。鉄棒にさわりに来ている子どもたちは、「校長先生見て見て!」とつぎつぎと技を披露します。僕も、うれしくなって、「すごい」だとか、「うまいねえ」なんて、声をかけたり、「〇〇ができるようになりたい!」と言う子には、やってもらって、気づいたことを伝えたり、補助したりしています。

夏休み前に、何度も鉄棒にやってきては、「空中前回り」ができるようになりたいと言う、女の子がいました。僕のみとりでは、足振りと回転のタイミングが合っていないこと、鉄棒をぎゅっと握りすぎていること、身体の回転と手首の回転が同じになってしまっていること(空中前回りは、手首が先行して回っていかないと、鉄棒の上に上がれないのです。)が課題だなと思いました。問題山積です。

彼女にポイントを伝えて、彼女の練習が始まりました。その時々で、動きをみとって、アドバイスを改めて送ります。なるべく以前と変わったこと、良くなったことを中心に伝えました。また、補助したり補助的に使うタオルを用意して、腰に巻かせ、鉄棒と一緒に握るように伝えて回ってもらったりしました。

けれど、なかなかできるようにならないのです。それはそうです。「空中前回り(前方支持回転)」は、難易度の高い技なのでから。

それでも彼女は、毎日のように鉄棒にやってきます。「先生、できないよ」なんて弱音を吐きながら、何度も何度も回るのです。僕は、声をかけたり、補助したりし続けていましたが、いつ「もういい」と言い出さないか内心はらはらしていました。

彼女は、弱音をもらしながらも、やっぱり練習をし続けました。できないから、いいやという選択もありました。その困難から逃げたって、誰からも責められることもありませんし、困ることもありません。けれど、彼女の「できるようにになりたい」という気持ちは、彼女を奮い立たせ、鉄棒にさわらせつづけたのです。

そして、ついにその日はやってきました。練習を始めてから、数週間は経っていたと思います。あまりきれいな回り方ではありませんでした。最後のところは、よっこらしよってやっと上がった感じだったように記憶しています。でも彼女の満面の笑みといたら……。本当に素敵でした。こちらの方がうれしくなって、「やったあ」って万歳しました。

彼女の、諦めずに取り組む姿勢、素敵だと思いませんか。この姿勢は、どこから生まれたものでしょうか?!それは、自分ならできる。努力すれば、なんとかなりそうだという「見通し」があったからです。「見通し」をもてるということは、そういう経験を積むとともに、うまくいかなくとも、「結果」ではなくて、「過程」(自分が頑張っている取り組んでいるそのこと自体)を認めてもらえてきたからに他ありません。もっと言えば。この経験等が本人の自己肯定感・自己効力感に結びついているのです。

鉄棒が苦手という6年生の女の子2人は、「ふとんほし」の技が怖くてできないと言います。「頭が下になるから、怖いんだよ。でも、慣れてくるから、やってみない?!」なんて誘ったら、チャレンジしました。まず、そのことを喜んで、次に、最初にやったときと次にやったときの差(良くなったところ)を伝えました。

2人とも、まんざらでもないような表情をして、再び鉄棒に触っていました。

この2人も、やっぱり素敵な子どもたちです。だから、僕は、またうれしくなります。